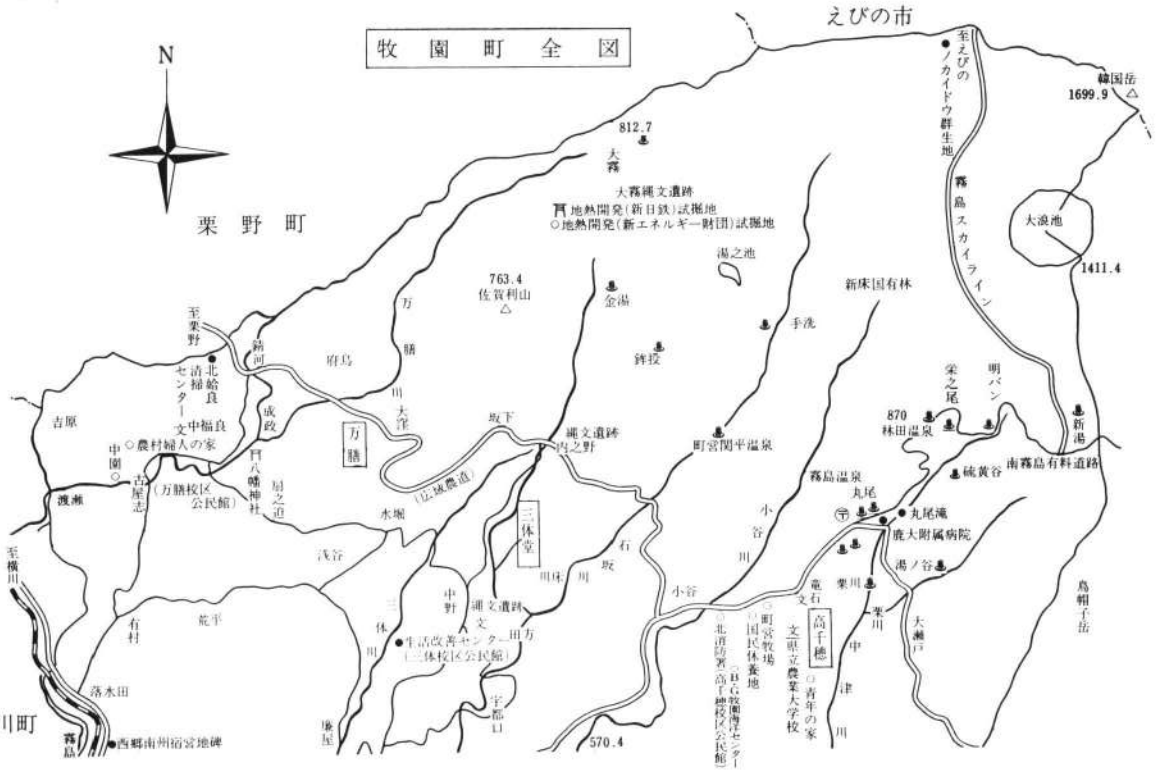
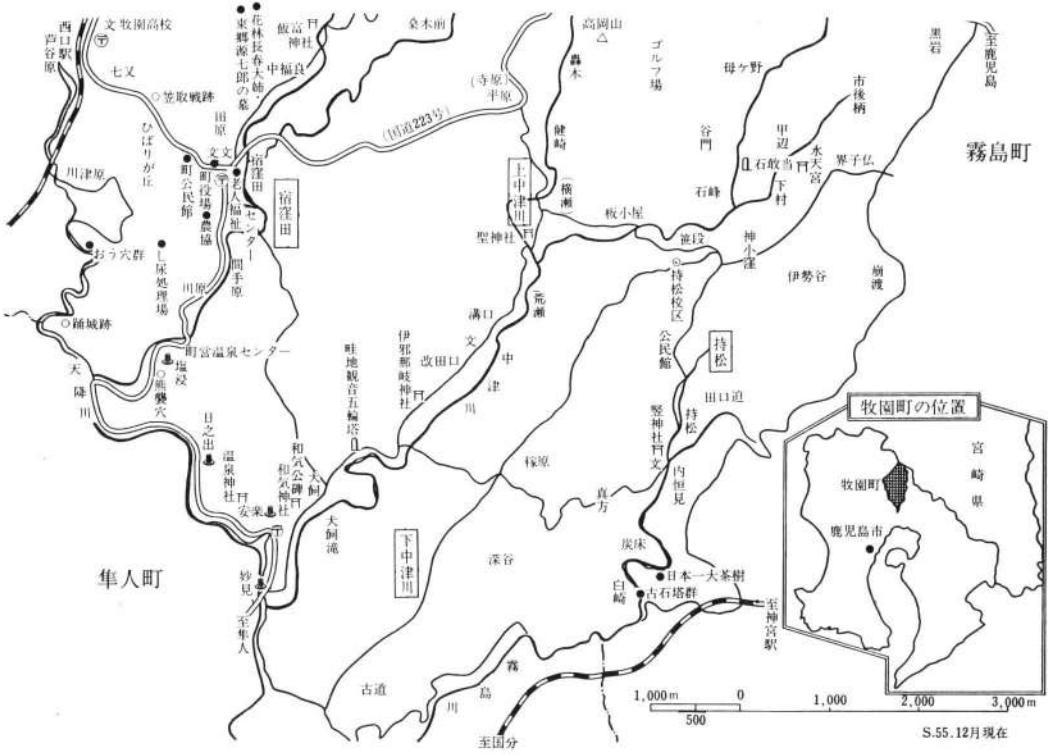
第一編　地　誌

牧園町全図


N
えびの市
栗野町
横川町
至えびの
ノカイドウ群生地
霧島スカイライン
韓国岳
1699.9
大浪池
1411.4
812.7
大霧
大霧縄文遺跡
地熱開発(新日鉄)試掘地
地熱開発(新エネルギー財団)試掘地
湯之池
新床国有林
763.4
佐賀利山
金湯
手洗
鉾投
町営関平温泉
至栗野
霧島
府島
万膳
万膳川
大洋
坂下
縄文遺跡
内之野
(広域農道)
三体堂
石敷川
小谷川
小谷
栗川
中津川
栗之尾
明バン
870
林田温泉
新湯
南霧島有料道路
硫黄谷
霧島温泉
丸尾
丸尾滝
鹿大附属病院
湯ノ谷
大瀬戸
鳥帽子岳
竜石
高千穂
文県立農業大学校
青年の家
町営牧場
国民休養地
北部防衛センター
北部防衛(高千穂校区公民館)
吉原
中園
農村婦人の家
古屋志
(万膳校区公民館)
北給食センター
中福良
文
渡瀬
成政
八幡神社
屋之迫
浅谷
水堀
三体川
中野
縄文遺跡
生活改善センター
(三体校区公民館)
宇都口
万田
有村
荒平
落水田
至横川
霧島
西郷南州宿営地碑
570.4


霧島町
隼人町
牧園町の位置
牧園町
鹿児島市
宮崎県
至鹿児島
黒岩
市後柄
甲辺
水天宮
界子仏
石敢当
下村
母ケ野
谷門
石峰
ゴルフ場
高岡山
森本
健崎
(寺原)半原
桑木所
飯富神社
中福良
花林長春太姉ノ墓
東郷源七郎の墓
(国道223号)
上中津川
聖神社
横瀬
板小屋
笹段
神小窪
伊勢谷
崩渡
持松校区
公民館
持松
田口迫
竪神社
内恒見
真方
炭床
日本一大茶樹
白崎
古石塔群
至神宮駅
稼原
荒瀬
溝口
中津川
伊邪那岐神社
改田口
畦地観音五輪塔
和気公神社
大飼
大飼滝
下中津川
深谷
霧島川
古道
至国分
七又
西口駅
西谷原
牧園高校
笠取戦跡
ひばりが丘
川津原
田原
町公民館
町役場
農協
老人福祉センター
宿窪田
川原
間手原
おう穴群
上尿処理場
鉢城跡
町営温泉センター
塩浸
熊襲穴
天降川
日之出
温泉神社
安楽
妙見
至隼人
1,000m 0 1,000 2,000 3,000m
500
S.55.12月現在

第一章　位置・面積

一　位　　置

牧園町は、鹿児島県のほぼ東北部を占め、姶良郡の北部に位置し、鹿児島市より離る東北に約四九・一km、九州山脈の南端に噴起する霧島火山群の山麓一帯の地を占め、北は宮崎県えびの市ならびに栗野町に接し、東は霧島町、南は隼人町と国分市、西は天降川をはさみ横川町に接している。

この東西に狭く、南北に長い地域を持つわが牧園町の最北端は、大字万膳大霧の牧園町、栗野町、宮崎県えびの市の三境界点で、北緯三十一度五十六分二十五秒二、最南端は大字下中津川古道で北緯三十一度四十七分三十九秒、また東端は、大字高千穂で、宮崎県境にそびえる霧島火山群の最高峯韓国岳の頂上東経百三十度五十一分五十一秒八、西端は大字万膳吉原の東経百三十度四十三分五十秒六である。東西一〇・五km、南北一七・五kmの菱形をなしている。

二　面　　積

本町は総面積一二九・四八㎢（一二、九四八ha）で、その広さは郡内一位、県下町村（市を除く）第九位で吉松町の約二・四倍、溝辺町の二倍、横川町の一・八倍の広さをもつ大きな町であるが、総面積の七六・七二%を山林原野で占め、農耕地はわずかに一〇・一〇%、その

◆面積　　54年12月1日現在

総面積	12,948ha	100%	摘　　要
①山林原野	9,934〃	76.72	国、県、町、民有、原野
②農用地	1,307〃	10.10	水田、畑、草地樹園地
③その他	1,707〃	13.18	宅地、道路、河川他

◆土地の利用形態　　54年12月1日現在

① 山林原野

私有林	5,670ha	43.79%
町有林	1,619〃	12.50
県有林	167〃	1.29
国有林	2,246〃	17.35
原野	232〃	1.79
小計	9,934〃	76.72

他が一三・一八%となっている。面積の内訳は前記のとおりである。（資料・町企画課）

農地は、水稲の減反政策により水田の荒廃が多く、畑地においても地形的な不利と労働力の劣悪化による耕作放棄、転用が目立ち減少の一途をたどっている。農地の転用状況をみると、山林への転用が八二%あり、また、最近宅地への転用も多く、全体の一五%を占めている。これは、田畑の耕地面積は減少し、反面、山林・樹園地・草地・原野の面積が増加したことを物語る。

② 農用地

水田	398ha(333)	3.07%
畑	423〃	3.26
樹園地	256〃	2.00
草地	230〃	1.77
小計	1,307	10.10

※水田（　）は水稲作付面積

水稲の生産調整により、作付面積が減少し転作がなされているが、山間狭あい地においては荒廃水田が多い。

③ その他

宅地	267ha	2.06%
鉱泉地	11〃	0.08
雑種地	84〃	0.65
道路、河川、公共用地他	1,345	10.39
小計	1,707	13.18

（資料、町企画課）

第二章　地勢・地質

一　地勢・地質

牧園町の地勢を概観すると、北東部は韓国岳、大浪池、新燃岳、中岳、高千穂峯などの霧島火山群が高く連なってそびえている。その南西斜面の裾野は遠く延びて更に南方に広く開けて標高二〇〇〇mから六〇〇〇mの火山噴出物原野を構成している。ここに位置する牧園町は、北東部が高く南西部に向って低いこの波状高地によって占められ、谷間は一般に深く切り立っており、地形は急峻で複雑な様相を呈し、平坦地は極めて少い。

これらの地形を、霧島連山の生いたちと、姶良カルデラ説によって考察すると、本県の陸地は、いまから約一億九千万年から七千万年前「中生代」のアルプス造山運動によってつくられた。それで基盤は四万十層群（四国四万十地方に広く分布する四万十層群の延長とみなされ四国における地層名に倣うている）といわれるもので中生代のジュラ紀から白亜紀に西南日本外帯に厚く堆積した頁岩、砂岩の互層からなる水成岩の地層で、新生代初期の大きな変動をうけてはげしく乱れている。そして約三千万年前「新生代第三紀」の中ごろから、あいつぐ火山の噴出で「旧霧島火山帯」が形成された。この時期は、大小さまざまな規模で地盤のあがりさがりがあり、第三紀層の堆積がおこなわれている。ところが「第四紀」、（新生代の後半で百万年前から現在まで）に入って「旧霧島火山帯」の東側に現在の「霧

きりしまの山々

島火山帯」が生まれた。

霧島火山は多数の小規模な火山から成立った複合火山で、完全火口十五、火口湖十、爆裂口八がある。東南の御池から北の飯盛山まで直径約二〇㎞、西の烏帽子岳から東の夷守岳が約一二㎞、山麓の周囲は五〇〇㎞に達する日本有数の大火山地域を形成しているが、主峯高千穂一五七四m と韓国岳一六九九・九m を結ぶ線は、西北―東南に走って宮崎、鹿児島の県境となり、山腹は東北に下って宮崎県側にえびの市、小林、都城などの盆地をつくり、西南鹿児島側には牧園高原から鹿児島湾北岸のシラス台地群に続いている。この霧島山系の群峯は、高千穂峯の頂上から考察すると、だいたい北から南東に二〇㎞の四大縦列をしているが、この流れに直交する栗野岳―飯盛山と佐賀利山。えびの岳―白鳥山、甑岳、さらに大浪池―韓国岳と烏帽子岳―新燃岳―大幡山―丸岡山―夷守山を結ぶ四つの横列があり、この縦、横列の線上に多くの温泉が湧出している。

霧島火山帯の生いたちは、相当複雑で諸説があるが、この地区に流入した姶良火山の噴出物（シラスと熔結凝灰石）によって古期と新期に分けることができる。古期のものは更に栗野岳安山岩類、白鳥安山岩類の二活動期に分れ、いずれも広い裾野台地の基底にまで及ぶ広大な楯状火山を形成したようである。今日前者は、栗野岳（一〇九四m）後者は白鳥山北方（一三〇〇m）蝦野岳（一三〇五m）獅子戸岳（一四二八m）などにその一部を残している。この古期の火山活動後、県下一円及び熊本、宮崎方面に分布しているシラス・熔結凝灰岩は姶良、阿多の火山活動が旺盛な時、両カルデラから噴出した大量の軽石流とされ、この噴出物によって古期の霧島火山は一応おおわれたといわれている。現在浅谷、轟木、母ヶ野等の霧島山山麓を中心として標高四〇〇m以下より隼人町、国分市の沿岸一帯に見られる十三塚原、春山原、須川原等、及び本町南部の稼原等標高約二五〇m内外の高原となったもので、霧島火山の熔岩類からできている山岳地帯とは地質的に異っている。

新期の火山活動は高千穂を中心とする東部火山群と韓国岳を中心とする西部火山群とがそれぞれの地域に別個に展開した。前者に属するものには高千穂峯、新燃岳、御鉢などがあり、後者には、韓国岳、大浪池火山などがある。御鉢や新燃には有史以来の噴火が記録されてい

る。

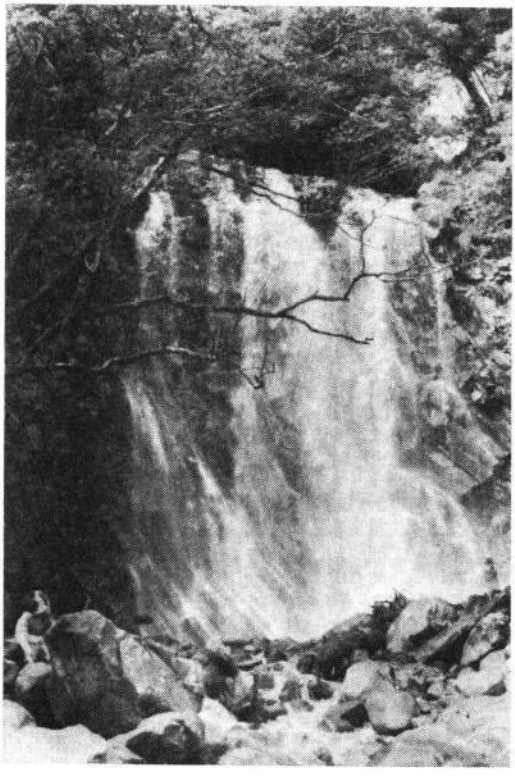
旧霧島熔岩よりできている火山は六観音池、韓国岳、大浪池、丸岡山、大幡山、夷守岳、二つ石等で、もはや火山活動はみられない。火山の建設は終り、外界や自然の力によって破壊されつつあり、山体も偏平で、大きな火口や爆裂火口を有しているものもあり、ただ噴気孔や温泉にむかしの名残りを留めている。新霧島溶岩に属するものは、飯盛山、不動池、甑岳、硫黄山、白紫池、新燃岳、中岳、御池、高千穂峯、御鉢等で、その形体は円錐形又はつりがね型をし、あまり外界の破壊を受けていない。火口内は急斜しており、熔岩原も原形のままである。時々火山活動をなしている。

霧島火山は地方水系に対する分水領をなし大体三方へ水を流している。その一つが、火山の南に源を発し西南流して隼人町日当山、国分平野を流れて鹿児島湾に注ぐ天降川である。

天降川は多数の支流を併せて流れているが、牧園町北西佐賀利山の北方、東方に源を発している万膳川、三体川及び大浪池の裾から流出している石坂川、小谷川、中津川は激しい浸蝕を起こし、この地域に変動を与え、複雑な地形をつくっている。中津川は上流において急流をなし、地盤の熔岩をうがち丸尾の滝（安山岩の柱状節理がみられる）をつくり、笹之段にて前方が開け平地となる。この支流である小谷川が霧島街道に沿い牧場を流れ、轟木付近から灰砂層の上を流れ深い谷をつくり、前者と合流して中津川の平地に水田地帯を形成している。更に犬飼部落を過ぎて犬飼滝となりこれより火山噴出物である熔岩を浸蝕して深谷をなしている。石坂川及び三体堂田原に段丘をつくっている三体川は宿窪田で合流している。ここに火山灰沖積地をつくり、城ヶ後を過ぎるにおよんで峡谷をなしている。また万膳川は支流錆河川と成政で合流し、前方の広い火山灰沖積地を流れ、渡瀬を過ぎて金山川に合流する。金山川は横川町山ヶ野金山に源を発して横川、牧園付近でかなりの段丘をつくり、植村にて万膳川、塩浸温泉付近にて石坂川、妙見にて中津川を合流して南流している。上層のシラス層から下層の泥熔岩まで浸蝕され険岸が両壁にそそり立ち清流が岩をかんで、流れる勝地である。この渓谷左岸に新川温泉郷をつくり国道二二三号線が昭和四十二年新川渓谷経由につけくわえられた。

標高大なる霧島山系から流下する川沿いに平地が形成され、一般に川沿い及び周辺に部落は存在している。この地域は通常高冷地で高い標高の地域であるが、耕地は大体標高一五〇*m*から六〇〇*m*のところに展開しており、水田は谷間の河川流域に迫田棚田状に展け畑は山麓や丘陵面に段畑、傾斜畑状に拡がっている。耕地を切開くことは自然的に困難で、耕地率は低く一二パーセントにも達していない水準である。

鹿児島県には新生代第三紀中新世以降から現世に至る間に噴出した火山岩類および火山放出物が分布し、ことに薩摩半島北部および南端部、霧島地区、鹿児島湾の北西部および薩南諸島に広く分布している。霧島火山の噴出順序及び地質は中世層の基盤の上に第三紀中新世～鮮新世の火山岩類がのり、さらに霧島の活動前半またはそれ以前に活動した姶良、加久勝などのカルデラ噴出物が広く分布している。霧島火山の活動は第四紀（百万年前～現在）の更新世（洪積世ともいい百万年前～一万年前）以降で、噴出物は古い方から順に栗野安山岩類・白鳥安山岩類・古期噴出物、現世（沖積世ともいい一万年前～現在）に入って桜島火山と活動時期がほぼ同じである新期噴出物に四大別されている。つまり霧島火山は古い時代からの火山岩の重なりから成るわけで、栗野、白鳥両安山岩類の正確な地質時代はわかっていない。鮮新世安山岩として本町では佐賀利山、及び



丸尾滝

三体堂の中野、川床、田方より宇都口、轟木にわたる佐賀利安山岩、手洗、大霧より内の野、浅谷にいたる牧園安山岩、烏帽子岳を中心として栗川、市後柄付近までの烏帽子岳安山岩類で大半が輝石安山岩であるが、佐賀利山地方に角閃石安山岩が一部分布している。輝石安山岩の斑晶は斜長石、普通輝石、紫蘇輝石で橄欖石を伴っている。これらはほとんど火山形態を失い烏帽子岳等一部を除いて丘陵状を呈している。霧島火山群の熔岩は輝石安山岩類を主とし、斑晶～微斑晶有色鉱物として普通輝石、紫蘇輝石の他に橄欖石をしばしば認められ、角閃石は栗野安山岩類にわずかに見出される。また古期噴出物中に橄欖石玄武岩がわずか含まれる。熔岩は必ずしも塊状のものばかりでなく、破砕されたもの、集塊岩質のものなどもある。

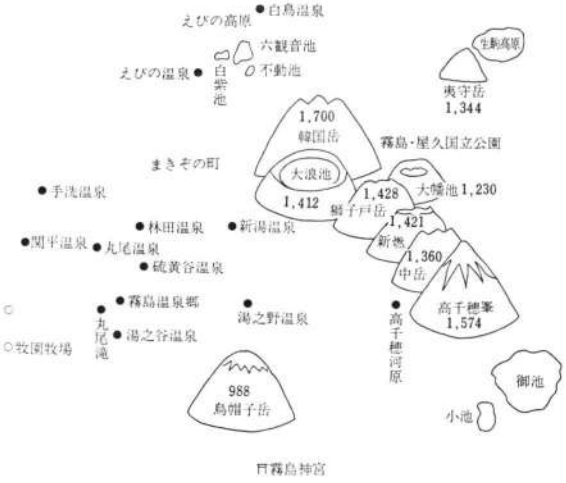
新生代第四紀の更新世以降に生じた姶良カルデラは大量の噴出物を降下または流出させているが、(1)降下軽石、(2)やや熔結した軽石流、(3)暗灰～灰色の熔結凝灰岩に至る種々の岩相があり、およそ(1)に相当するものをシラス、(3)に相当するものを灰石と普通よんでいる。

シラス（または灰砂層）は南九州に広く分布し本県の約半分と宮崎県の約二〇パーセントの面積を占め、本町においては標高約四〇〇mの中部一帯（浅谷、轟木母ヶ野）より下場に分布している。地形が急峻であると共に、崩れ易く、地辷りを生じ、畑作において干害を受け、劣悪な土壌として土地利用の点でも問題となる厄介物として取扱われてきた。これまでシラスとして一括してきた堆積物は、白灰砂質堆積物を総称する地方的俗語であって、火山灰、火山砂、軽石質火山礫のあつまりでこれに岩石の名前をつけてみると角礫含有軽石質凝灰岩といっている。組成はガラス質部および軽石部が大部分を占め、結晶として少量の石英、長石、紫蘇輝石を含み無層理で固結しない。灰石はシラスにくらべ軽石、火山灰の熔結度の進んだ灰白～暗灰色の熔結凝灰岩（火山砕屑物が噴出し厚く堆積したとき、まだ熱く、長い間高熱状態におかれていると自身の重みで圧縮されて、ついに中心部において熔融がおこり、一見熔岩に似た緻密な岩石となる）で泥熔岩ともいわれ、岩質が硬く建材として採取されている。河川の浸蝕作用によって形成された切り立った断崖一帯に熔結凝灰岩がみられる万膳川上流の成政、三体川の鹿ノ屋、石坂川上流の宇都口、下流の間

霧島山噴火山一覧表

	火山 湖	海抜m 山頂 湖面	岩石	特徴
1	佐賀利山	763	角閃安山岩	円頂丘または岩脈
2	矢岳	1,132	輝石安山岩	鐘状火山、径500m の火口跡山体の侵蝕著しい
3	烏帽子岳	988	橄欖石 輝石安山岩	円錐丘、南東に開く火口跡
4	湯の谷岳		安山岩質	南に開く径1.5kmの火口跡
5	栗野岳	1,094	安山岩質	西に開く火口跡
6	蝦野岳	1,305	同上	径600m の火口、山麓にノカイドウ
7	獅子戸岳	1,428	同上	山体は全く侵蝕される 西部に白色粘土質
8	飯盛山	846	橄欖石 輝石安山岩	浅い小火口湖、最も新鮮
9	白鳥山	1,250		浅い小火口湖 冬期は凍結する
10	六観音池	1,300		径500m の火口湖
11	甑岳	1,301	橄欖石 輝石安山岩	
12	不動池	1,240		径210m の火口湖 P・H2.2強酸性
13	硫黄山	1,300	凝灰角礫岩	砕屑丘、火山弾多く、硫黄岩石の粘土化著しい
14	韓国岳	1,700	輝石安山岩	ホーマテ、径900m の火口 火口壁の比高170m
15	爆裂口 (北西)		同上	径500m
	琵琶池	1,330	凝灰角礫岩	韓国東北の爆裂火口径200m
16	大浪池火山	1,412	紫蘇輝石安山岩	ホマーテ

	大浪池	1,239		径630m の火口湖、火口壁の比高170m、水深116m
17	夷守岳	1,344	橄欖石輝石安山岩	コニーデ、北麓に熔岩台地頂上の火口は東壁を欠ぐ
18	大幡池	1,230		爆裂火口、径500m 以高20m の丘が池をとりかこむ
19	大幡山	1,353	岩滓質の火山砕屑物	二重式火山、径50kmのカルデラ外輪山と径500m の火口をもつ中央火山
20	新燃岳	1,421	輝石安山岩その他	ホーマテ径750m の火口、径150m、深さ30m の火口湖、現在活動中
21	中岳	1,360	同上	二重式火山、外輪山には径700m のカルデラ、中火口丘には径200m の浅い火口
22	御鉢	1,420	同上	径600m の火口、有史以来、しばしば活動、高千穂峯寄生火山火口の深さ234m
23	高千穂峯	1,574	同上	二重火山、第一次火山の火口を埋めて、第二次の活動があり頂上に火口なし
24	二つ石	1,300	同上	径500m の火口、山体侵蝕ややすすむ
25	小池	420	同上	二つ石火山の熔岩せきとめ湖
26	御池	305	同上	径1km の爆裂火口湖、深さ101m で日本最深の火口湖、湖岸20m 以上の崖



手原、塩浸、中津川上流の健崎、笹ノ段、及び下流の犬飼、金山川の川津原より安楽、妙見、新川渓谷一帯にみられる。

姶良カルデラ形成に先立つ軽石流は十枚あるといわれており、国分付近で四枚（新川・重久・岩戸・入戸）の各軽石流が重なっており、それぞれ熔結部と非熔結部とに分かれている。熔結部は浸蝕に対し抵抗が強く非熔結部は弱く、従って階段状の地形を示し、殊に国分付近では顕著である。この軽石流と軽石流との間に砂礫の水成層が挟まれていることがあり、この水成層は姶良層と呼ばれているがおそらく湖の堆積物と考えられている。国分地区において重久、岩戸両軽石流を間にして上中下の三部に区分され、上部層が安楽及び犬飼滝より下流、妙見地区でみられ約六〇*m*の厚さといわれ、岩相も多様で、ローム質粘土層礫層、砂層、軽石層およびこれらの互層からなっている。

◆馬込甌穴（おうけつ）群・軟弱な岩盤の川床に安山岩れきなどが水力で回旋し岩穴をつくり実に壮観で現在町文化財に指定

二　霧島の山と湖

◇韓国岳

古事記には、虚国岳と記されているが、この書き方ならば天孫降臨神話の後に記された「むなしの空国」にちなんだ名称と考えられる。宣長によれば「背に肉がないように、やせた不毛の地を通って」と解するが、古事記によれば、笠沙はこの虚国岳にま向いの地であるとも解せられる。霧島連山中もっとも高い山で、まんじゅうをもりあげたような形である。単独火山でこれ程ぼう大な山は、九州では他にないという。山頂には直径九〇〇*m*、深さ三〇〇*m*の鉢状の火口がある。

◇大浪池

独立した火山であるが、古くから湖沼として知られている。直径一*km*をこえ、火口壁は美しい灌木におおわれ、常に韓国の雄姿を写している。美女お浪の伝説（民話の項参照）がある。

◇白鳥山

えびの高原の北によこたわるように、広い山頂をも

霧島山の火口湖

ち、ここから最も手軽に登山できる山である。頂上の展望は非常によい。

この山の火口湖がビヤクシ池で、水深五〇cmから一m足らずで水底の草もみえる。数多い霧島の池のうち最も高い位置にあり、その浅さと相まって凍りやすいため、冬期スケート場として利用せられている。

◇えびの周辺

韓国岳の西北麓、一三〇〇mの高度に、円錐形の小丘の南側には、多くの硫気孔があって硫黄山とよばれる。もと硫黄の採集が行われたところで、その西北麓に不動池がある。直径二一〇m、円形の池である。附近に六観音池があり直径五〇〇m・水深一四・二m余、火口壁は明るい美しい樹木にかこまれている。その北岸に六観音の祠と、霧島東神社の上宮があり、附近に賽の河原とよばれる小石原がある。

◇甑（こしき）岳

韓国岳の北方にあり、山頂は平らかな円錐丘。南麓の飯野・小林方面に特徴ある姿をみせている。頂上には五〇〇mもある火口があるが、浅いので一面の草におおわれ、火口壁にはミヤマキリシマが多い。

◇獅子戸岳

西は韓国にうずめられ、南は新燃岳に破壊せられて、山相のまずしい小峯で、一帯の灌木におおわれている。

◇新燃岳

中岳と獅子戸岳の中間、円錐形にそそり立っているが登りやすい。火口湖は直径一五〇m、深さ三〇m、美しい硫酸銅の色をたたえている。近年（昭和三十四年二月十七日）大爆発をして、火口内に三個、火口外壁に四個の新火口ができた。

山頂のミヤマキリシマの大群落、西側斜面の樹木の一部も被害を受け、現在も尚噴煙をあげている。

◇中岳

新燃岳の東南に連なる台地状の峯で、山頂には、ひょうたん型の火口がある。火口は浅いので、しとね状の草原となり、ミヤマキリシマが美しく、特につつじの時期には列をなす登山客で賑わう。

◇大幡山

複雑な地形をした二重火山で、南方獅子戸岳に面する外輪壁は築山とよばれ、北西は大幡池の外壁となって境界ははっきりしない。中央の火口丘も平坦で、特徴のある峯は見られない。大幡山の北にある丸岡から眺めたとき、この老樹にかこまれた大きな池と、韓国、新燃、中岳、高千穂とつづく霧島連峯の大観はすばらしい。

◇高千穂の峯

霧島火山群の東端にそびえ、中央に光峯、東と西に二つ石・御鉢二つの寄生火山があり、二つとも一三〇〇m以下は完全に合体し、均整のとれた威容をほこり、古くから霊峯として知られている。

この高千穂の名は、いつごろから始められたものか明らかでないが、延喜式にある「智鋪（もほ）」にゆかりの名称と思われ、今は国分市重久にその地名をとどめている。日向児湯郡の高千穂についても、阿蘇に近く智鋪郷のあったことを証としている日向国史も同じような考え方をとっている。

山中の湖沼は、おおむね火口湖であり、魚類はあまり住めない。しかし水に含まれた鉱物質によって特徴のある色彩を発揮している。

古来霧島四十八湖といって、多数の湖沼があったというが、いずれも山上にたたえられていたため、自然と埋められたもの、流出したものなどが多く、今はその数を減じている。

三　霧島山の名称について

霧島山をさし示す名称として、古来、神話・伝説等に書き表わされたものはいろいろある。たとえば、霧島・高千穂峯・襲峯（そのみね）・槵触峯（くしふる）・久志布流峯、二上峯……等々。この中では、霧島が最もよくあらわれている。しかし、今では霧島というのは、山群全体に冠せられた名称であり、高千穂というのは、その東部の一高峯に限定されている。以下、霧島の名称の由来の諸説について列記してみよう。

『三国名勝図会』の記事によると

「――此の岳、本名ハ高千穂トイエドモ、従来霧島ヲ以テ通称トナス。」とあり、

『日向風土記』の記事には、

一、天孫降臨ノ時、霧深クシテ物色ヲ弁ゼズ。稲穂ヲ投散シ給イシニヨッテ、雲晴レシ事、上文ニモ記セシガ如クニテ、此峯ハ特ニ朝夕霧常ニ深キ処ナリ。此処ニ至ッテ然リトス。故ニ霧島ト名ヅクトイエリ。

二、一説ニ皇孫天降ノ時、雲海ヲ見下シ給ウニ島ノ如ク見ユルモノアルヲ、天瓊矛（アメノヌボコ）ヲ以ッテカキ探リ、其処ニ天降リアリ、其矛ヲ逆矛（サカホコ）ニ立テ給ウ。是ヲ天逆矛ト号ス。今ニモ雲霧都城ノ曠野ヨリ高千穂峯ノ山腰ヲ擁スル時ハ、其ノ中ニ一峯顕ハレ出デ漂見島ノ如シ。故ニ古ヨリ都城ノ地ヲ雲海ト言イ、又、其ノ地ヲ虚海トモ言ウ。霧島ノ名ハ是ヨリ出タリトス。

三、一説ニ天孫稲穂ヲ撒ジ給イシニ、雲霧開キ晴レシヨリ霧島ノ名起ルト言エル説アレドモ、霧島ノ名ハ其以前ヨリノ名ニテ、瑞穂ノ縁ニシヨリ高千穂峯ノ名ヲ得シニテ、今猶霧島ト言ウ名ニ呼ビ来タルハ却ッテ其旧称ニヤヨリタラント言エリ

四、一説ニ霧島の字、蓋シ続後紀承和四年（八三七）ヨリ始マル、曰ク、霧島峯ノ神、官社ヲ預カル。是ナリ。先是、古書ノ内所見アルヲ見ズ。続紀延暦七年（七八八）火ヲ曽ノ峯ニ発ス。承和四年ニ至ッテ実ニ五十年ナレバ、其ノ霧島ト名ヅクル此ノ間ニアルベシ。近ク此秋桜島火ヲ安永八年（一七七九）ニ発ス。爾後今ニ至ッテ五十年、猶煙霧ヲ帯ブ。是ヲ推シテ見レバ、此峯霧ヲ以テ奇ヲ示スガ如シ。因ッテ其ノ名ヲ得タルナラン。但シ島ノ名ヲ配スルハ、

イワユル、漂渚ニ本ヅクナルベシトイエリ。

上文ニ記セル諸説アリトイエドモ、蓋シ、第一説ノ如ク此ノ峯霧深キ縁故ニテ名ヅケタルナラン。島ノ字ハ上古此ノ岳ノ下ノ周廻水沢ナリシ故ニ因ツテ名ヲ得タルナルベシ。云々……。

霧島ノ名称ハ上文ノ諸説ヲ考ウルニ、高千穂ト霧島トハ古来皆縁故ニ因ツテ両名伝ワルヲ、此ノ峯常ニ霧深キ処ナレバ、現ニ朝夕見ル景状ヲ呼ビ習イ、霧島ト唱エ、其ノ呼称盛ニナリテ世ニ行ワレ、高千穂ノ名ハ次第ニ隠レツルナラン。云々……。とある。また、

『古事記』には、

「天ノ八重多那雲ヲ押シ分ケテ、イツノチワキニチワキテ、天浮橋ニ浮キジマリ、タリタタシテ高千穂峯ニ天降リマシキ。」と、高千穂の名が表われ、

『日本書紀』には、

「……高千穂峯ニ天降リマス。既ニシテ皇孫ノ遊行（イデマ）ス状ハ即チ、久志曰二上天浮橋ヨリ、浮渚在平（ウキシマタビシロ）処ニ立タシテ。」とある。この外日本書紀には霧島のことが幾通りにも記されているが、中に、日向襲之高千穂槵（くしひ）日二上峯、とずいぶん長たらしい名も出ている。日向の襲地方の高千穂と名づけられた霊山で、二つそびえた峯を持った山といった調子の呼び方であろう。

高千穂二上峯の呼び名について、『日向風土記』に天津彦火瓊々杵尊（アマツヒコホノニニギノミコト）、日向ノ高千穂二上峰ニ天降リマシシ時、天暗冥（ソラノクラタ）クシテ昼夜別カズ。人物道ヲ失イ、物ノ色別カチ難カリキ。茲ニ上蜘蛛（クモ）アリ。名ヲ大鉗、小鉗トイウ。二人奏シケラク、「皇孫尊、尊キ御手以ツテ、稲千穂ヲ抜キテ、籾トシテ四方ニ投ゲ散ジ給ワバ、必ズ開明（アカ）リナム」ト申シキ。時ニ大鉗等ガ奏セルガ如ク千穂ノ稲ヲ搓ミテ籾トシテ投ゲ散ラシ給ワバ、即チ天開明（アカ）リテ日月照レリ。因ツテ高千穂二上峯ト曰（イ）ウ。」とある。このほかにもいろいろあるようであるが、だいたい上記と同じようなものであろう。このようにみてくると、その真偽は別として、霧島は、その名前の上からでも、古い伝説の上に立っているといえよう。

霧島の七不思議の中の一つに、「蒔かずの種」というのがある。霧島の山中、竹やぶの中などに、自然生の陸稲がはえることがあるという。これを、まかずの種という。これは、天孫降臨の際、高天原から持ってきた種が残っていて、山の中で自然に育ったものだと

言い伝えられている。

四　踊郷時代の「川」について

牧園が、踊郷と呼ばれていた時代、今の万膳川・三体石坂川・中津川をどのように言っていたのであろうか、「桑原郡地誌備考」の川調帳に、次のように書いてある。

。一、有田川　萬膳村

水源七さ田ヨリ落水田ニ流レ、芦谷原ニテ五分、川通エ入。（今の万膳川は、有田川といわれていた。）

。一、踊川（三体堂村 巣窪田村）

水源巣窪田村頭韓国嶽西又霧島西嶽トモ・赤谷南、海老野・セン水南・千本八里・湯池・ホコナキ湯・今平・ウト・萩ノ峰・竹田南・上湯池・手洗湯・中ノ・高田・奈木・古城　小谷川五ツ円フテ流、里程二里九分、又三躰堂村・スヽキハ（下・内ノ・三躰堂・朝谷・坂元　小谷川三ツ円フテ流ル里程一里七分合十一川一線ニ円フ・中村・瀬木・明・岩下・田原・マチ原・黒沢津・川原・踊・城ヶ尾・汐浸・温泉　経テ凡一里合三里九分流落往還橋下ノ方ニ於テ新川通エ流入ス。

。一、上中津川（下中津川）　（上中津川村 下中津川村）　安楽村

・大浪ノ池・池平・手洗湯・明峯山・オムラ岳・平原・千本八重・山城・栄ノ湯・小谷・轟木・一筋川　上中津川村通山ニ至ル、二里五分流又・焼地獄・明峯山・ウツラ・殿湯・以下不明・□ノ脇・硫黄・□ス川・小谷川　三ツ吐合上中津川ニ通・坂元屋・通山・横瀬ニ至ニ・栗川湯　里一分皆一川ニ成テ下中津川村・宇都・田代・犬鳥滝・三所社・アセチ　ヲ落チ安楽村・瀬戸口ニ於テ一里五分四里一分ヲ経テ新川通エ流入ス。

（石坂川と三体川の合流した川を、踊川とよんでいた）

五　「新川」の名称変更

河川名変更認可ノ議ニ付申請（県知事へ）

本県下姶良郡ノ中央ヲ貫通スル新川ハ、聖峰霧島山ヨリ発スル幾多大小ノ河川ヲ合流シ、同郡隼人町浜之市ヨリ海ニ注ギ、大隅国ニ於ケル屈指ノ大河ニシテ、古ハ之ヲ天降川（アモイガワ）ト称シタルガ、文禄年間藩主島津義久公ガ隼人町富隈城ヲ築ク際之ヲ改修シ、東国分村小村ニ注ク河床ヲ、現在ノ浜之市ニ変更サレタルヨリ以来、新川ノ名ガ一般的トナリタルモノニ有之、「天孫襲ノ高千穂ニ天降リマシキ」ノ記録ヲ実証スル旧称ガ、消滅ニ帰スルハ甚ダ遺憾ノ次第ニ有之、且時局下、肇国精神ノ発揚上、古来ノ河川名ニ復帰スルコトハ、最モ適宜ヲ得タルモノト被存候ニ

付、之ヲ天降川ト改称ノ儀御認可被成下度、考証書類トシテ別紙三国名勝図会竝薩隅日地理纂考写相添へ姶良郡各町村長連署ノ上此段及申請候也

昭和十六年十月　日（牧園時報八七号）

◆ 地名あれこれ（その一）

（窪田記）

◇ **踊の麓**

昭和のはじめまでよく使われていて、「踊郷」の府本（屋形）のあるところという意味である。踊はもと北原氏の所領であった頃の城の名前であったが、島津氏の所領となった頃、税所氏の所領であった持松を合わせ、近世のはじめに百二外城の一つとして、一つの行政区画となったのが踊郷で、その中心として地頭の屋形であるところが麓と呼ばれた。麓の郷士たちの調練の場所が**馬場**または**仮屋ん馬場**であった。城は山にあり、そのふもとという意味である。

◇ **三体堂**（さんでど）（今別府記）

三体堂は明治二十二年牧園村が生まれるまでは、桑原郡踊郷三体堂村と呼ばれていた。三体堂という名の由来については、

㈠、飯富神社に、倉稲魂命・天照大神・天児屋根命の三体の神が祭ってあったので三体堂という説と。

㈡、三体堂には観音堂（飯富神社一の鳥居前方）・釈迦堂（中福良）・さんかく堂（中郡）の三つの堂があったので三体堂という説がある。

古文書の中に出てくる三体堂の「体」の字が、躰・台・手・臺・代とさまざまに使われているのもおもしろい。

躰……台明寺文書・応保二年（一一六二）の記に「三躰峯」「三躰堂田」とあり、

。東郷源七郎知行目録・元和六年（一六二〇）の記にも「三躰堂村」とある。

。また、桑原郡地誌備考「川調帳」の記も「三躰堂」となっている。

台……地誌備考の中では、「三台堂村、下三台堂村の二村に分つ」と書いてある。

手……元和六年の高帳には「三手堂」とある。

臺……慶長十九年の高帳には「三臺堂」と書いてある。

代……薩藩沿革地図・天正十四年（一五八六）の記には「三代堂」とある。

第三章　気　　象

霧島山麓南西に広がるすそ野、山岳、高原、山峡の地形で、標高差が激しく気象状況は一定せず、上場・下場の寒暖差があるが、総体的には冷涼である。

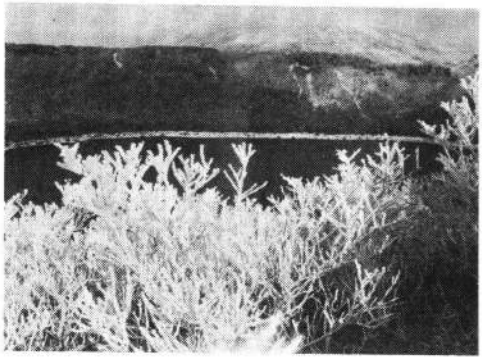
従って、緑茶の生産・冷涼地野菜の栽培に適している。平均気温は、観測地の農業大学校（高千穂）で十五度であるから、町平均すると十六度と推定される。福岡・鹿児島に比較すると、夏は涼しく鹿児島よりも二・三度低い。冬の最低気温は鹿児島にくらべ、六度～十五度も低く肌を刺すような寒風が吹きまくる。

降水量は、五十四年は二、二八五㎜とやや少いが、別表気象概況(2)の一〇年間の平均降水量をみると、二、六五九㎜、二、五九四㎜と、西南風のもたらす湿気と、霧島連山の走向とが年間二、〇〇〇㎜以上の多雨地帯をつくっている。特に集中豪雨のあった昭和四十四年には三、一〇一㎜。昭和四十六年には、三、一五七㎜、昭和四十七年には、三、四四八㎜の年間降雨量を記録している。

また台風の平均通過地帯であって、生育生物に対する直接的影響は勿論、風水害に加うる土壌浸蝕、養分流脱等農業生産を規制している。

気象的特徴としてはさらに霧の深いことがあげられる。これは平均気温の低いことと相俟って、茶の栽培に好適である。

北東部霧島連山地帯の夏は、上昇気流がはげしく乱雲や霧の発生が多く、冬は美しい霧氷がみられる。



大浪池の霧氷

気 象 概 況

(1) (昭和54年1月～12月)
(比、鹿児島、福岡)

月	月平均気温			日最高気温		日最低気温		月降水量		
	牧園	鹿児島	福岡	牧園	鹿児島	牧園	鹿児島	牧園	鹿児島	福岡
	度	度	度	度				mm		
1月	7.7	8.6	7.7	17.0	14.2	−3.0	3.8	90	116.5	54.5
2	7.5	10.0	8.0	19.0	14.6	−4.2	5.7	96	50.5	100.5
3	8.6	11.7	9.9	19.0	16.6	2.6	6.8	255	250.0	162.5
4	13.3	16.3	14.0	22.0	21.1	0.6	11.6	215	200.5	136.0
5	16.1	18.8	18.1	26.0	24.1	6.2	14.0	111	128.0	81.5
6	21.3	24.3	23.6	29.0	27.7	13.3	21.4	476	399.5	585.5
7	24.1	26.4	26.3	29.1	30.0	20.1	23.3	400	270.0	151.0
8	25.0	28.3	27.9	30.3	32.5	20.6	24.9	170	211.0	112.0
9	22.4	25.9	24.6	29.5	30.2	17.3	21.9	140	222.5	70.0
10	16.2	20.1	19.0	26.0	25.6	6.9	14.9	141	154.5	102.0
11	7.6	14.2	12.5	24.4	18.4	−5.0	9.9	105	118.0	105.5
12	7.2	10.4	9.3	19.6	16.5	−1.8	5.0	86	53.5	81.5
年平均	14.75	17.9	16.7	24.2	22.6	6.1	13.6	年計 2,285	2,174.5	1,742.5

◦福岡管区気象台（福岡市中央区大濠1丁目2の36号）
◦鹿児島地方気象台（鹿児島市荒田1丁目24～13号）
◦鹿児島農業大学校（牧園町高千穂3311）
の観測による。

気 象 概 況

(2) 昭和31年～50年―平均気温、降水量
（牧園町）

	(イ) 平均気温 C			(ロ) 降水量 mm		
	自昭和31年 至 ～40年	自昭和41年 至 ～50年	昭和54年	自昭和31年 至～ 40年	自昭和41年 至～ 50年	昭和54年
1月	4.2	5.1	7.7	82.0	53.0	90.0
2	5.6	5.9	7.5	106.0	98.0	96.0
3	11.1	8.1	8.6	153.8	113.0	255.0
4	14.2	14.2	13.3	269.1	251.0	215.0
5	17.5	17.7	16.1	457.2	197.0	111.0
6	21.6	20.4	21.3	388.4	581.0	476.0
7	27.6	24.7	24.1	490.4	520.0	400.0
8	26.2	25.0	25.0	201.9	279.0	170.0
9	24.7	22.4	22.4	165.9	195.0	140.0
10	19.8	17.5	16.2	101.1	122.0	141.0
11	14.0	12.1	7.6	115.9	66.0	105.0
12	5.5	6.7	7.2	127.3	88.0	86.0
年平均	16.0	15.0	14.75	2,659	2,594	年計 2,285
最高気温	29.5	33.1	29.3		昭46 3,157	
最低気温	−3.5	−8	−5		昭47 3,448	

観測所 {昭和31～40年　牧園町営牧場（高千穂）
　　 {昭和41～50年　農業大学校（同上）

第四章　台風と霧島山の噴火

一　台　風

鹿児島県の特徴として台風の常襲があげられる。県人みずからが「台風銀座」と称し、毎年台風による降雨量も多く、その被害は甚大である。昭和二十年から今日まで鹿児島県を襲った主な台風についてしらべてみた。

▲枕崎台風（昭和二十年九月十七日）

十二日にマリアナ群島付近に発生。十七日午後二時三十五分に枕崎付近に上陸。最大瞬間風速六十二・七m。九州を斜断して伊予灘、広島を襲い日本海へ抜け、奥羽を横断して太平洋に出た。県内の死者百四人。不明二十五人

▲デラ台風（昭和二十四年六月二十～二十一日）

十五日頃パラオ北方に発生。二十日午後九時すぎ九州南端に上陸。勢力は上陸後おとろえたが、この台風襲来とともに、梅雨と台風の雨が重なって豪雨となる。最大瞬間風速四十三・六m・死者七十三人。不明二十二人

▲ジュディス台風（昭和二十四年八月十五日）

十一日パラオ北西洋上で発生。十五日夕方、九州南部をかすめて同夜九時に志布志付近に上陸。最大瞬間三十九・四m。死者四十三人。不明四人。

※「三十数名が圧死？　ガケ崩れで霧島館全壊」（南日本新聞）

豪雨による山崩れのため、霧島館が全滅の被害を受けたのもこのジュディス台風であった。

▲キジア台風（昭和二十五年九月十三日）

十三日志布志付近に上陸。九州を縦断し日本海へ。最大風速三十九m。死者三人。不明二人。

▲ケイト台風（昭和二十六年七月一日）

九州に接近夜十時頃四国へ上陸。熊毛・大隅地方に大雨。最大風速三十・二m。死者七人。不明一人

▲ルース台風（昭和二十六年十月十四日）

午後七時頃串木野付近に上陸。九州を斜断。台風の規模が大きかったので九州南部では強い暴風雨

に見舞われ、特に鹿児島・枕崎・串木野では高潮の被害が大きかった。最大瞬間風速五十四・二m。死者百二十六人。不明八十三人。特記される大型台風

▲台風五号（昭和二十九年八月十六日～十八日）
十八日午前二時頃川内川河口に上陸、九州を縦断し四国へ、最大瞬間四十三・五m、死者十三人。
※新湯に災害発生。死者九名

▲台風七号（昭和三十二年八月十九日～二十一日）
九州西方海上を北上。最大瞬間四十五・九m

▲台風十号（昭和三十二年九月五日～七日）
六日午後六時大隅半島南端に上陸。最大瞬間六十五m。死者三人。不明五人

▲台風六号（昭和三十四年八月六日～八日）
八日朝大隅半島に上陸。日向灘へ。最大瞬間四十三・六m。死者七人

▲第二室戸台風（昭和三十六年九月十四日～十六日）
十六日午前九時すぎ室戸岬に上陸。四国・近畿で大あばれ。最大瞬間五十・一m。死者八。不明二

▲台風十三号（昭和三十七年八月二十一日～二十二日）
二十一日午後十一時すぎに川内と阿久根の間に上陸。最大瞬間三十二・六m

▲台風十四号（昭和三十九年八月十六日～二十四日）
二十三日午前枕崎付近に上陸。最大瞬間五十四・二m。死者七人

▲台風二十号（昭和三十九年九月二十三日～二十五日）
二十四日午後五時頃鹿児島湾の入口から大隅半島南部に上陸。日向灘へ。最大瞬間六十八・五m。死者六人

▲台風十五号（昭和四十年八月四日～六日）
六日午前甑島を通り、九州を斜断。最大瞬間五十四m。死者十九人

▲台風十九号（昭和四十六年八月四日～六日）
※八月四日、気圧九三五ミリバールの大型台風来襲。五日から六日にかけて霧島山系の北部を中心に集中豪雨。山崩れによって住家倒壊。死者七人（高千穂二人、三体堂四人。万膳一人）の貴い犠牲者を出す。牧園町における被害総額九億三千九百万

円。

金丸知事、自治省、建設大臣、係官、国会調査団等来町災害実状調査。土木関係＝道路、河川、橋梁等計三三六、一二五千円。農林業関係＝農業施設二一四、七三四千円。農作物七六、六〇〇千円。教育関係＝二三、〇〇〇千円。家屋＝七〇、四〇〇千円。商工関係＝四七、六五八千円。住家全壊三〇。台風十九号により牧園町は未曽有の大災害を受けた。

二　霧島山噴火の歴史

有史以来、記録に見られる霧島山の噴火の歴史をたどってみると、次のとおりである。

○天平十四年（七四二）十一月、大隅国、地震。大隅国二十三日より二十八日に至るまで、地大震動す。仍て神命を聴聞せしむ。（県史）

○延暦七年（七八八）三月四日、地震、噴火、大隅国曽於郡曽乃峯霧島山上に火災上り、雷鳴を伴う。峯下五、六里沙石積ること二尺。その色黒し。（県史）

○天慶八年（九四五）僧性空霧島山に登り、法華経を誦して神に祈ること七日を期す。居ること五日にして山震動し、猛火熾んにして暫くも止まるべからず。天暦中に至りて性空乃ち煙火をさけて、迫門丘の神廟を西北二里許の地に遷す。（襲山考）

○天永三年（一一一二）二月二日、霧島山西峰、噴火。霧島山上大に燃え、神社焼けず。（錫杖院縁起）

○永久一年（一一一三）二月三日、霧島山噴火し、社殿焼けず。（日地）

○仁安二年（一一六七）、霧島山噴火。西生寺殿堂焼崩す。（県史）

○寿永二年（一一八三）十二月十七日、大隅国霧島山噴火す。

○文暦一年（一二三四）十二月二十八日、霧島山発火、甚だ盛にして、祠宇皆焼尽す。尚日本地理資料には、（霧島山噴火）、社寺什宝等悉く焼失す。（県史）

○大永四年（一五二四）是歳大隅霧島噴火（地学協会）

○天文二十三年（一五五四）霧島山又火を発す。

○永禄九年（一五六六）九月十九日、霧島山噴火、人多く焚死す。（県史）

○天正二年（一五七四）霧島山神火を発して、天地震動す。（襲山考）
○天正四年（一五七六）霧島山神火を発す。天正四年より六年に至りまた炎ゆ。（鹿児藩名勝考）
○天正十五年（一五八七）四月十七日、霧島の神火震動す。
○天正十六年（一五八八）三月十二日、霧島山上神火を発し、申酉の間大地震
○慶長三年（一五九八）より慶長五年（一六〇〇）に至り炎ゆ。（鹿児藩名勝考）
○慶長十八年（一六一三）より翌年まで炎。同十九年諸国大地震。（鹿児藩名勝考）
○元和元年（一六一五）
○元和三年（一六一七）元和三年より翌年に至る。（鹿児藩名勝考）
○寛永五年（一六二八）九月二十九日、霧島山噴火し、社寺宝物焼亡す。（日地）
○寛永十四年（一六三七）丁丑より翌年に至る。（鹿児藩名勝考）
○万治二年（一六五九）巳刻正月より寛文元年（一六六一）十二月に至る。（鹿児藩名勝考）
○寛文二年（一六六二）八月より発して寛文四年（一六六四）三月に至る。（鹿児藩名勝考）
この年九月十九日三時、大隅地大に震ひ海嘯起り、山崩れ地裂く。陸地海となる。（日本震災凶饉改）
○延宝五年（一六七七）霧島山神火起。（古年代記）
○延宝六年（一六七八）正月九日同神火起。（古年代記）
○元禄三年（一六九〇）六月、霧島山噴火、降灰数日に及ぶ。（日本震災凶饉改）
○宝永二年（一七〇五）十二月十五日。霧島山噴火、神社塔等悉く焼失す。（日地）
○享保元年（一七一六）二月十八日、霧島三山噴出致し百万の雷一度に轟くばかり、黒煙は一千丈許も上り地は震動してやまず、尚噴火の煙に砂混りて降り下りて、白黒おぼろ月夜のごとし、是より火口は両部の池の方に移り、同年三月十六日に至り、両部の池堤は、裂壊し終り、池は一つにあり、噴火ますます激しくなりゆきたり。（霧島東神社社記）
○享保元年（一七一六）九月二十六日、夜半頃より霧島の西岳震動して、周囲三里半程処処に噴火破裂し、

為に其の地内にある所の山林及び神社仏院等は悉く焼失し、其の他災害を被りしもの、外城（外城とは一ヶ郷を云）十二焼失し、この家数六〇〇軒、負傷者三十一人、斃死の牛馬四〇五頭、田畑六二四〇八段六畝十九歩、此の農産高六六一八二石余（官報）、其の後三十四年の間灰下りて恰も春霞の如くなりしと云う。（日本災異誌）

また、「日本震災凶饉改」には、享保元年の噴火について、二月霧島山噴煙を始む。九月霧島山爆発して堂宇、山林等焼失す。十二月霧島山噴火、降灰四日に及び近傍の田畑埋没す。と書いてある。

また、「県史」には、享保一年十二月二十六日、霧島山新燃大に爆発す。田畑損じ人馬死失す。とある。

○享保二年（一七一七）一月三日、霧島山噴火、新燃又大燃有り此以後七日より十一日迄、打続大燃彼辺火石にて家屋焼失、錫杖院寺家不残焼の田畑石灰にて降埋、牛馬過分死失、高原、高崎両所役人共迄方へ引越居候、旧臘二六日より当正月十一日迄度度大燃日向国諸県郡の内諸所損失致す次の通、田畑一三万六千三〇〇坪余、石砂灰入高三万七九五〇石余、雑穀一五四〇石余、堂社一一宇寺、家三〇軒、寺門前五三軒、社家二六軒、百姓一四軒、死人男一人、けが人三〇人、死牛馬四二〇匹。（厳島福ノ助編纂鹿児島県噴火書類）

○八月十五日、霧島山大いに火あり、硫黄地より迸り、大石空に跳り火気炎々として昼夜絶す。その響迅雷の如し。土灰近国に飛び近郷田を埋むこと数十里、衆恐怖しあるいは以て山神怒れるとし、あるいは神火と称す。こうして相次ぐ噴火に、土民恐れおののいたので、国主島津吉貴（二十一代）は国中に命じて、怪異説、神火説を禁じ、僧徒がこれに乗じて供物を求めて、祈禱しているのを聞き、これを禁じたので国中大いにこれに服し、怪異説も止んだということが残っている。（西藩野史）

○明和八年（一七七一）秋霧島山大噴火、降灰あり、昼にして夜に異らず、数里の田を埋没し、草木焦枯る。また「日地」には、霧島山噴火、享保一年より是歳に至り、大に噴火屢熾なり。焼石焔となりて虚空より隕ち、沙石糠を篩る如く灰燼両て昼も夜も異ならず、行人筵席を載て其圧傷を遮り防ぎけり、数

里の間田疇を埋没し、草木枯る。と書いてある。

○文政四年（一八二一）十二月二十日朝、中岳の絶頂より火を発し……晩方に相成り、黒煙おびただしく炎上り、近辺の地までも震動致し候、云々。（震災予防調査会報告書所載、伊地知茂七氏より今村博士に提供せられし文書）

○明治十三年（一八八〇）九月、霧島山御鉢より爆発す爾後蒸気硫煙を噴出す。（日地）

○明治二十一年（一八八八）一月二十七日、西曽於郡霧島岳鳴動、噴火飛灰四、五里内の村落に降下す。（凶荒誌）

○明治二十二年（一八八九）十二月十日、霧島岳噴火、響激雷の如く、黒煙忽ち天に漲り、火石は硫黄灰に燃え移り、延焼熾なり。（凶荒誌）

十八日午後〇時半頃より爆発愈々猛烈となり、降灰地上に二、三分爾後激変なし。

○明治二十四年（一八九一）六月十九日、霧島山爆発、降灰のため草木の葉を凋枯す。（日地）

○明治二十八年（一八九五）十月十六日、霧島山爆発、噴火時刻午後〇時二六分一六秒、家屋二二軒焼失す。四人惨死す。（鹿児島県災異誌）

○明治二十九年（一八九六）三月十五日、霧島山爆発、フランス海軍士官一名負傷す。案内者一名死す。

○明治三十一年（一八九八）十二月二十六日、霧島山爆発、宮崎・松山・高知等にて爆音をきき降灰あり。

○明治三十三年（一九〇〇）二月十六日、霧島山爆発、五名の死傷者あり。（鹿児島県災異誌）

○明治三十六年（一九〇五）十一月二十五日、噴火

○大正二年（一九一三）十一月八日、霧島火山は、本日八日午後十一時三十分頃、突然大鳴動を起し、火焔高く天に昇り、引続き降灰ありたりと云う。

○大正三年（一九一四）一月八日、午前二時二十分頃爆発す。宮崎にて戸、障子震動す。北諸県郡西嶽村に栗の実大の石を降らし、姶良郡東襲山村には降灰あり、人畜に対し被害なし。

※この年一月十二日に、桜島が大爆発をしている。

十一月八日、午後十一時頃霧島山爆発し鳴動起る。宮崎県下に少許の降灰ありたり。

○昭和三十四年（一九五九）二月十七日、新燃岳爆発、大噴煙を吹き上げ、新燃のミヤマキリシマ全滅の危

機にひんす。

昔のものは、はっきりしないが、享保の噴火は新燃岳であり、明和の噴火は御鉢と推定される。文政の噴火中岳とあるのは、新燃岳のことであろうと推定、その後、明治・大正の噴火は御鉢が中心になって活動し、最近は新燃岳が活動している。

こんなに度々噴火しているのであるから、昔からこの山中で命を失ったり、家財や田畑を失った人の数もずい分多かったであろうことが想像される。信頼の程はわからないが、永禄の噴火では、庄内の一向宗信者三〇〇人が、霧島詣りの際突如として噴火、ことごとく焼け死んだという記録が見えていると伝えられるし、享保の噴火の時も、神詣りのため御鉢の麓まで来て泊っていた福山の一一人が、遭難したという記録も残っているという。

○この項、鹿児島県災異誌（県発行・測候所発行）山川鉄三郎・三木英太郎共著「マウント霧島」より。

霧島山噴火の記録をみると、その中の大きな噴火、爆発は、牧園から仰ぎ見られる新燃を中心として、古代の天平十四年以来たびたびくり返されているようである。特に、享保の大爆発による地震と降灰、明和の降灰、明治時代の大爆発と、その都度の降灰等、吾々の祖先は、この霧島山麓に農業を営み、作物を栽培し、子供を育てながら、噴火や地震とどのような闘いをくり返し、生きてきたのであろうか、むかしは火山の観測もなく、地震の予報も出されず、いつ起るか知れない爆発や地震に、恐れおののきながら、火の山霧島を、東に眺めていたであろう姿が想像される。この火の山、霧島といかに闘い、調和を保ちながら生活してきたか、その生活の歴史はわからない。

新燃は、昭和三十四年噴火してから、大きな爆発はないが、現在も活動をつづけている。

第五章　人口・世帯

本町の人口は、昭和三十年の一五、二八六人を基準とすれば、減少の一途をたどっているが、対五十三年二三・五%減。五十四年二三・八%減、五十五年二四・六%減となっている。年平均減少率一・〇二%で、隣接町と比較すると、霧島町一・〇五%、栗野町一・五三%、横川町一・八七%、吉松町一・九二%であり、本町の減少率は比較的ゆるやかである（昭和五十三年比）。本町昭和五十五年では年平均減少率は〇・九八%である。

これは、一次産業の停滞による流出が主で、三次産業（観光）の発展による高千穂地区の人口増が抑制作用として働き、現状を維持している。今後もこの傾向は続くものと考えられるが、人口増加の基調は低い。

老齢（六五歳以上）人口も平均寿命ののびにより今後ますます老齢化は進行する。ちなみに昭和三十五年国調から、五十年までの経過をみると年平均二%近くの伸び

牧園町人口の推移（対30年比）

項目＼年度	30年国勢調査	35年国調	40年国調	45年国調	50年国調	55年国調
人　口	15,286	14,595	13,459	12,285	11,853	11,518
30年国調との対比	100%	95.4	88.0	80.0	77.5	75.34

世帯数の推移

項目＼年度	30年国調	35年国調	40年国調	45年国調	50年国調	55年国調
世帯数	3,226	3,277	3,315	3,437	3,567	4,174
30年国調との対比	100%	101.5	102.7	106.5	110.5	129.4

一世帯当り家族数の推移

項目＼年度	30年国調	35年国調	40年国調	45年国調	50年国調	55年国調
一世帯平均家族数	4.74人	4.45人	4.06人	3.57人	3.32人	2.76人
30年国調との対比	100%	93.8	85.6	75.3	70.0	58.2

率を示している。

男女別人口構成は、昭和四十年女一〇〇人に対し男八八・二人、四十五年・五十年八五人、五十五年は八四人となり、女性比率が高い。

人口密度は、昭和五十年で一㎢当り九一・五人、県の一八八・三人より大幅に低い。さらに昭和五十三年度は、九〇・三人となり、昭和五十五年は八八・九人となっている。世帯数は増加しているが、家族数においては減少し、核家族化の進行と観光地にみられる特性として、単身世帯の増があると考えられる。

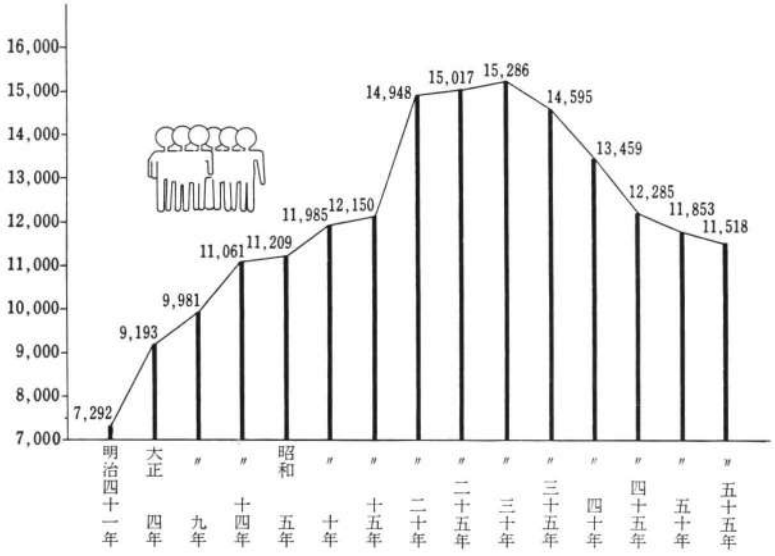
◆牧園町の人口のあゆみ

年別	世帯数	男	女	総人口	一世帯平均
					人
明4	809	—	—	3,826	4.72
〃41	1,245	—	—	7,292	5.86
大4	—	4,632	4,561	9,193	—
〃6	—	5,072	5,035	10,107	—
〃8	—	4,904	4,805	9,709	—
〃9	2,280	5,052	4,929	9,981	4.38
〃11	—	5,333	5,270	10,603	—
〃13	—	5,458	5,394	10,852	—
〃14	2,272	5,557	5,504	11,061	4.87
昭2	—	5,244	5,389	10,633	—
〃5	2,378	5,629	5,580	11,209	4.71
〃10	2,497	6,057	5,928	11,985	4.80
〃15	2,525	6,056	6,094	12,150	4.81
〃20	2,824	6,818	8,130	14,948	5.29
〃21	2,906	7,587	7,803	15,390	5.30
〃22	3,032	7,364	7,710	15,074	4.97
〃23	—	7,209	7,567	14,776	—
〃24	—	7,380	7,780	15,160	—
〃25	3,091	7,357	7,660	15,017	4.86
〃26	3,083	7,379	7,667	15,046	4.88
〃28	3,005	7,309	7,588	14,897	4.96
〃30	3,226	7,534	7,752	15,286	4.74
〃33	3,233	7,321	7,639	14,960	4.63
〃35	3,277	7,031	7,564	14,595	4.45
〃38	3,350	6,497	7,167	13,664	4.08
〃40	3,315	6,307	7,152	13,459	4.06
〃43	3,528	5,966	6,852	12,818	3.63
〃45	3,437	5,646	6,639	12,285	3.57
〃48	3,655	5,470	6,517	11,987	3.28
〃50	3,567	5,447	6,421	11,853	3.32
〃51	3,539	5,375	6,335	11,710	3.31
〃52	3,586	5,449	6,347	11,796	3.29
〃53	3,549	5,418	6,280	11,698	3.30
〃54	3,543	5,413	6,233	11,646	3.29
〃55	4,174	5,277	6,241	11,518	2.76

町村変遷史、旧村誌、町企画課資料による。

◆年次別人口の推移

（国勢調査集計による）但、M.41.T.4.は旧村誌より。

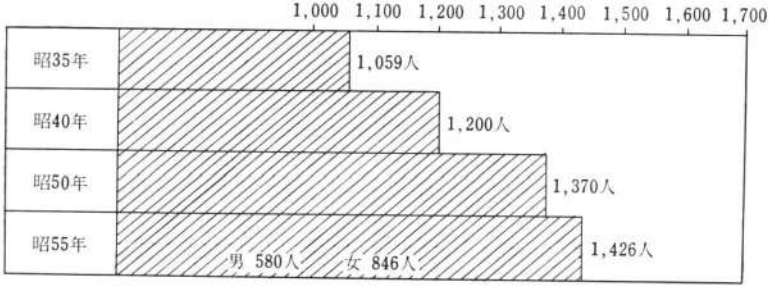


校区別人口の対比

校区名	年次	人口 総数	男	女	校区名	年次	人口 総数	男	女
牧　園	50	3,155	1,478	1,677	三　体	50	758	385	373
	55	3,219	1,502	1,717		55	721	366	355
中津川	50	1,891	866	1,025	万　膳	50	1,227	567	660
	55	1,712	798	914		55	1,170	540	630
高千穂	50	3,821	1,663	2,158	持　松	50	1,012	484	528
	55	3,815	1,662	2,153		55	881	409	472

（資料　昭和55年国勢調査）

老齢人口の推移　（65歳以上）



◆人口動態　　資料（町住民課、牧園時報）

区分 / 年次	自然動態 A			社会動態 B			増減
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減	A＋B
大正13年	408	177	231				
〃 15年	337	269	68				
昭和2年	400	225	175				
〃 3年	436	207	229	1,205	1,326	△ 121	108
〃 14年	437	231	206				
〃 35年	231	91	140	827	1,185	△ 358	△ 218
〃 37年	190	88	102	783	1,262	△ 479	△ 377
〃 38年	203	128	75	978	1,031	△ 53	22
〃 39年	215	88	127	819	1,380	△ 561	△ 434
〃 40年	164	102	62	819	1,156	△ 337	△ 275
〃 45年	164	113	51	1,049	1,466	△ 417	△ 366
〃 46年	126	98	28	1,065	1,389	△ 324	△ 296
〃 47年	162	112	50	1,318	1,270	48	98
〃 48年	161	114	47	1,152	1,383	△ 231	△ 184
〃 49年	177	114	63	1,063	1,310	△ 247	△ 184
〃 50年	179	121	58	1,070	1,203	△ 133	△ 75
〃 51年	172	111	61	837	1,076	△ 239	△ 178
〃 52年	152	116	36	944	884	60	96
〃 53年	161	86	75	891	1,038	△ 147	△ 72
〃 54年	146	106	40	861	939	△ 78	△ 38
〃 55年	157	104	53	869	974	△ 105	△ 52

◆自然動態人口（出生死亡）

本町の自然動態人口は、出生が死亡を平均して上回り、過去一〇か年の平均自然動態（増）率は平均〇・四五%である。出生率が上り、平均寿命ののびによる死亡率の減が、自然動態増加率を上げることになりこれが人口増加の基本である。従って老齢化も進むが、若年層の定着をはかり、出生率増加をはかることが最大の課題である。

◆社会動態人口（転入転出）

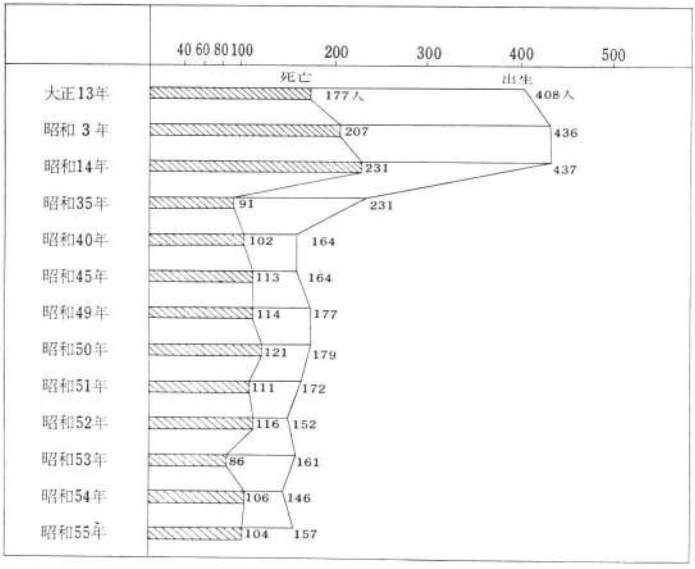
社会動態人口は、依然として転出が多く、本町の特性として観光産業に異動が激しくみられ、昭和五十一年以降転入が著しく減少している。これは、社会経済事情によるものと思われる。過去一〇か年の社会動態減少率は年平均一・四九%である。

◆「昭和五十五年国勢調査」より

昭和五十五年十月一日全国いっせいに行われた国勢調査の中間集計結果の概数が、県統計調査課から発表され、牧園町の人口は一一、五一八人。世帯数は四、一七四戸となっている。

五年前の国勢調査より、人口で三三五人の減となり、世帯数では六〇七戸

◆人　口　動　態（出生・死亡）



の増となっている。

鹿児島県の人口は、百七十八万四千三百六十四人で、五年前の国勢調査時にくらべて、六万四百六十二人（約三・五％）の増となっている。世帯数では、六十万六千八百七世帯で、前回より五万六千五百十世帯増えている。

一方、県全体人口の五年前との比較では、市部人口が九十九万一千五百十四人で約七・〇％の増、郡部人口が七十九万二千八百五十人で約〇・六％の減となっており このことは、県内での過疎、過密現象がはっきりしてきたことを物語っている。

牧園町の場合、昭和三十年の一五、二八六人にくらべ今年はこの年より三、七六八人、二四・六％の減となっている。しかし本町の減少率は現在スローペースとなっている。

◆人口減少が及ぼす社会的影響

本町の人口推移をみると、隣接町村にくらべ、比較的ゆるやかであるとはいえ確実に減少している。

人口流出の原因は多々あるが、最大の要因は経済事情の変化であり農林業の低経済性と地場就業機会の少ない

ことである。若年層の流出による老齢人口の増加、労働力の劣悪化は町の活力をなくしてきた。高度経済発展の運動原則として過疎と集中過密化を生じ、いろんな弊害をひきおこし、農村は常に産業経済予備地域としての役割を果たし、生産、生活機能、教育、保健、防災など基礎的行政条件の低下を招き、本町としても行政水準の維持向上に苦慮しつつ、つとめてきたところである。

著しい過疎地域に対しては、「過疎地域対策特別措置法」が適用されてきたが、牧園町は、準過疎地としてこの恩恵にも浴せず、いわば過疎、過密の谷間として、住民の理解と協力により行政推進にあたってきたが、今回国の三全総（第三次全国総合開発計画）にみる生活、生産、機能の調和した定住構想にもとづく住みよい町をつくるために積極的に国、県の施策をうけいれ、若年層の定着できる環境整備をはからなければならない。

幸いに、人口流出も安定化の方向で横ばい状況になりつつあり、やや活力をとりもどしつつあるが、今後対処しなければならない問題として、高齢社会下における老人問題、福祉年金、老人医療に関する国民健康保険への対応、農林業の兼業老齢婦人化にともなう生産力低下への懸念、商業活動の低迷、消防防災においては、組織の高齢化による消防力の維持、児童生徒の減少のもたらす社会的影響は、はかり知れないものがある。地場産業の振興を促進し、働く場の確保と生活環境を整備し、文化・教育・医療・福祉の充実をはかり、より豊かで自然と生活、機能を調和させた、活力のある町づくりのため、人の交流と定住する施策を積極的に講じなければならない。

（町総合振興計画）より

第六章　地　名

一　字　名

牧園町内の大字は、藩政時代の村名であって、町村制施行以来大字名となっている。その数は大字七、小字は九八一である。

◆大字　**宿窪田**　小字数一四八

川影・川影前畑・ウケノロ・芦谷原・芦谷原前田・芦谷原田神・芦谷原川原・堂ノ山・登明田・後方・芦谷原上・七俣平・登明迫・大道迫・大道中迫・柿木迫・鶴ケ野・上原・田原・田原山・後迫・瀬戸口・沓ケ迫・浜ノ場・大迫・大迫平・市塚・七俣・北脇山・西瓜越・毛森・芝良・平之山・川津原・貫ノ口・小瀬戸・棚ケ迫・松ケ迫・八窪・芋洗・時仏・宿ノ迫・宿窪田・牧園・鳥越・南迫・別堂山・網掛・別当・枝ケ迫・瀬戸・桜ケ迫・戸草瀬戸・桜ケ迫尻・真米・猿越・外川原・稲荷迫・枦柄・建添・湯ノ段・湯ノ迫・入佐ケ迫・藤ケ中尾・大胡麻ケ迫・胡麻ケ迫・轟平・上ノ迫・遠目塚・間手ケ迫・間手ケ原・岩下・城ケ後・下牧・前田・三畝元・岩崎・登別・雀ケ原・ヒガン田・雀ケ原山・坂元・赤田・椿・大丸・城ケ鬼・奈良木田・檜木・向荒・星ケ迫・岩崎迫・牧神岡・石坂山・池田・真角・島田・鬼沢津・花立・石坂松ケ迫・瀬ケ迫・尾上迫・馬場口・横瀬踏切・須ノ迫・弓張木・小段・沓日方・井丸迫・金差段・門ノ木・唐笠松・桑鶴・桑鶴平・都ケ原・行司知行・市来迫・鍋倉・孫八・川原後迫・川原前迫・札建・柿ケ迫・滝ケ迫・藤ケ山・湯ノ窪・塩浸・湯ノ上・戸崎・平落・寅ケ迫・宮ケ迫・芝峯・手ケ迫・コラ谷迫・コラ谷・枚山・別府・針ノ崎・湯ノ原・丸羽・原・越附・須滝・新湯・砂子・安楽・梅ケ渡・葉切

◆大字　**三体堂**　小字数一四〇

音川田・長田・下原・大丸・奈良木・岩崎・牛角・川原崎・桑木前・小丸・岩下・小床・宇都口・鍋山・谷ケ迫・札立・山ツケ・尾谷口・上小原・包ケ迫・楠木迫・立山・平黒川・七十走リ・桜ケ迫・篠丸・大薗・鬼ケ窪・井手ケ原・妙見原・渡瀬口・聞迫・登リ迫・宮ケ迫・音川前・中川原・外薗・堂ケ平・中福良・上原・棚ケ迫・後迫・

松迫・萩ノ段・渋迫・下大迫・中ノ迫・下中迫・瀬ケ迫・芦谷迫・桑木迫・下芦谷迫・度山迫・櫓山・櫓山上・後山・鶴係（つるがかり）・柿梁・赤池・集リ・引坂ケ迫・引坂迫平・外松・似ケ迫・御用ケ迫・人枯木・上大迫・小回迫・回迫・離山・且野場・チシヤケ迫・藤ケ迫・藤段・丸山・風呂谷・牧原・上牧原・赤子渡・上赤子渡・古屋敷・赤子・湯原頭・湯ノ原・池ノ谷・寺野・中原・倉掛・梅木山・提段・多々羅迫・岩山・別府田・原・前原・中野・今別府・宮田・桑木ケ谷・松木坂・上松木坂・新五屋敷・内野々・鉾投・手洗・関平・高野・一本松・豆打原平・豆打原・堂地・神田・川床・松ケ渡・持山・佐木段・枇杷ノ首・下ノ段・手崎谷平・宇瀬戸・四角目・四角目平・川床平・薗田・菅牟田・黒巣・新兵衛塚・田方・似尾・大平・西原・岩瀬戸・中岡・石ケ迫・蓑荷谷・荒平・池元・道ケ迫・古江山

◆大字　**万膳**　小字数二〇三

窪山・山渡瀬・中園・和田下・井手元・川窪・小園・遠目塚・和田・内の迫・イチコチ迫・松ケ迫・街道口・田子・西脇・牧原・清ケ迫・吉原前・吉原・栄良尾・与市ケ谷・萩の平・中岡・横射場・俵ケ迫・七曲・永山・湯谷・北園・無物田・仮屋下・前田・中福良・新改・成政・越ケ尾・九日田・下府鳥・西原・貫川・巡礼塚・錆河・若ノ上・立平・木場田・中肥・井の手平・瀬戸・黒丸向・木場迫・余慶松・石塚・湯助・永野・小比良・五敷・黒丸・黒園・下黒丸・佐賀利山・牛木屋・大良ケ谷・丸尾・木屋谷・鹿倉・伊丹ケ生・貴之多尾・銀湯・善王神・中之生・高塚・中之段・椎祭志・狸穴・後世宇都良・鳥足・小鉢・板小屋・海老野・出功平・音無・奥之院・入ケ中尾・観音街道・湶水・惣須木院・阿歴利鹿倉・宇津潟城・千迫・稲之段・内野々・元隆寺山・立山・坂の下・昌蒲ケ谷・茂市街道・芙黄木ケ瀬戸・上水堀迫・伊勢堀・柊木山・水堀迫・湯の迫・石の水・黒園下・大窪・山下・浜之湯・前平・穂出坂・上十石・岩屋平・皿北・滝の上・一本柊・巣ノ谷・斗星田・宮園原・平松・月の輪・竜ケ嶺・下十石・中尾・中段・三ケ元・宇都迫・堪忍迫・並松・珍多良・入迫・毛毬迫・古屋志・椿へ・水上・丸山・弓射場ケ谷・木佐ケ迫・先梶場・梶の場・供養塚・道ケ迫・浅谷・黒須・黒葛山・梁瀬塚・扇の迫・金木山・谷の口・向田・梅の木・渕之・川舟・今村原・前之迫・大迫・轟・上小笹・竹原・登迫・木登迫・馬渡・下扇迫・

下彦水・処迫・源太・下村松・村松・彦水・荒平・中岡・大岩下・茗荷谷ノ上・茗荷谷・赤池・水頭・栗野山・鵜飼ノ口・有村・城ヶ段・弐反田・城ヶ宇都・梅ヶ渡迫・落水田・車田・松崎・鍋迫・梅ヶ渡・緩目・妙見迫・桜ヶ迫・論ヶ迫・猫迫・花立・有村上・高尾・大迫・井手上・井手ノ山・緩子・南迫・乙迫・女田・滝ヶ迫・滝ヶ迫窪山・渡瀬

◆大字　**下中津川**　小字数一一九

妙見崎・岩下・和気ノ湯・滝下・滝ノ上・犬飼迫・幸蔵野・打越・北住・斜迫・打越手・亀松迫・エボシダケ・小山・平迫・傘松・坂下・梨窪・脇迫・赤迫・勤原・犬飼・田代・後迫・化鶴・今後迫・本迫・小後迫・今後原・草木迫・下馬塚・ビンヅル・ビンヅル尻・中迫・小中迫・水溜・知鳥迫・水留原・桃ヶ八重・タラキ迫・真角原・雷ヶ原・尾迫原・下原・桑木迫・上タラ木・早馬迫・改田口・上野原・萬徳・四ノ坪・三月田・八反丸・下川原・向田・向田原・鍋迫・荒田・南谷・坂水・橋口・門田・花草・小山口・大久保・ウフコエ・他ヶ迫・牛ヶ迫・細迫・先細迫・右牧・先右牧・浸坂・大口ノ谷・藤ヶ瀬戸・伊藤松・大堂・焼山下・焼山・榎迫・間ノ瀬谷・火峯原・タラガ迫・松ヶ迫・折橋後迫・東迫・桜谷・折橋・ナコチ・瀬戸山・中瀬戸山・木登迫・下木登迫・西ノ原甲・坂上・古道・別府・観音迫下・曲リ白尻・廻迫・八毛・星合原・越ヶ野原・論ヶ迫・大内迫尻・地頭原・東平・深谷滝平・笛ヶ迫・深谷・食田・大内迫・大人形・桜迫・船窪・稼原・戸井迫・迫田・水流

◆大字　**上中津川**　小字数七九

萬徳前田・越の一・越の二・上前田一・久保前・前原・馬場・宮ノ前・油田・川路山・井手原・梨子木・上向田・桑取迫・脇の迫・柳迫・橋の口・榎の迫・穂年・横迫・船ヶ迫・谷迫・干羅ヶ谷・谷頭・平早・中紙段・大目迫・迫の口・椅迫・七回・大久保・桜迫・宮の上・板小屋・道下・少原・池田・湯窪・鉾山・鷺・通山・扇の原・小松迫・宇都・後迫・湯迫・溝口・真角迫・出口・中迫・真角原・柊木平・鬼ヶ瀬戸頭・馬場口・鬼ヶ瀬戸・福迫・棚迫・通ヶ迫・千石迫・下原・健崎・健崎前・古江・宇都迫・上段・下段・包迫・池頭・井田水・一本木・塩水・開戸口・石峯・大久保原・谷門・川原・神小窪・川路・添ヶ迫

◆大字　**高千穂**　小字数三〇

手原前・平原・轟木・轟木山・須ヶ田・柳ヶ平・小谷・出口・高岡・荒平・内久保・丹ヶ野・岩下・山口・真頭・小塚原・八長・三本木・大瀬戸・栗川・竜石・殿湯・手洗・江藤谷・山城・丸尾・湯ノ谷・硫黄谷・栄之尾・新床鹿倉

◆大字　**持松**　小字数二六二

前田・天水堂面・内恒見・竹下・下リ・出泉迫・尾迫・小原迫・小原山・皆越・向田方・向田方平・向田・黒ヶ原・黒ヶ迫・下池・広池迫・広池・炭床・炭床山・床頭・淀迫・臼崎前田・総谷・滝ノ上・前春・滝ヶ原・折口・上床・下床・岩頭・岩原・折迫・滝下・童ヶ原・柿木迫・古臼崎・踏切・後迫・瀬戸上・臼崎宇戸・天水臼崎・仏前・猿喰・シホラ・山鳥田・ハナクルス・真方・間口・柳ヶ迫・上竹・深谷・松山・稼原・小松原・榎原・五反田平・総知尻・別府迫・勝尾岡・平原・平原前・狩田・外戸山・鳥越・向ヶ迫・向ヶ平・宇戸原・宇鳥越・宇戸原頭・中岡・百木迫・百木迫平・宮内迫・茶屋原・茶屋段・俵迫・田原迫頭・中ノ迫・中ノ迫尻・榎水迫・榎平・道ヶ迫・権定・亀甲・権溜・仁太迫・西之谷頭・西ノ谷・次米田・次米田頭・田方・田方頭・聖原・聖原頭・中道迫・中迫原・五右ェ門原・上道迫・扇迫頭・扇迫原・善五原・扇迫・狩松迫・井手丸頭・井手丸・高尾尻・高尾・高尾頭・井手迫・曲山尾・曲山・小井手ヶ谷・砂走・和志迫・扇迫枝・馬場原・馬場迫・勝間ヶ迫頭・勝ヶ迫・馬場迫尻・桑鶴・上穴・焼山・笹段前田・四郎ヶ迫・四郎ヶ山・頭迫・川久保・下溝・ナメラ・深迫前・ナメラ原・ナメラ前・川久保頭・川久保平・真川久保・佐敷原・佐敷段・佐敷迫・佐敷平・松ヶ峯・松北・松北頭・柿迫・湯黒ヶ谷・柿畑・赤ハゲ・赤ハゲ頭・天辰迫・天辰頭・登立・段床・犬ノ迫・犬ノ迫平・犬ノ迫尻・深迫・音森・乙森上・小路岡・小路原・岡・岡原・星ヶ迫・中辺原・岡山・所平・所迫・桑木頭・桑木畑・拝摩坊・植村前・植村・下村・後谷山・後谷・猿内・猿内頭・内訳山・内合・水洗・小渡・大渡・大渡下・大渡口・ヌキノ口・大渡上・大渡平・大渡裏・八丁山・出水原・中原・下原・中山・黒岩・向中春・市後原・市後柄・市後柄山・小渡川・小谷川・今水・今川・今水平・今水原・辻之原・次八堀・大迫原・堺子仏・堺子原・大合迫・伊勢谷山・森伏・崩渡頭・崩渡・白酒田頭・池迫・池迫原・弓張水・芝立・芝立原・白酒田・白酒田尻・伊勢谷平・伊勢谷・

新五屋敷・赤水・冷水谷・冷水原・冷水平・冷水岡・冷水段・イチノ木山・藤尾・阿三ノ迫・拾石平・拾石原・拾石迫・草子原・草子谷・草子段・回リ山平・小丸・鮫迫・鮫迫頭・田口迫・阿三迫尻・葛谷・間世・間世頭・白田・坪子田・卯先ヶ宇都・山神原・棚迫・中小路・三又・仮屋田

二　部落名（牧園町自治公民館設置規則による）

区　　名	部　　落　　名	世帯数
牧　園第1区	前塩浸、後塩浸、下塩浸、日之出、発電所	42
同　第2区	川原、城山、間手原	51
同　第3区	牧園、城ヶ後	79
同　第4区	下宿窪田、中宿窪田、上宿窪田、堂ノ下、麓、ひばりが丘(Ⅰ)、ひばりが丘(Ⅱ)、ひばりが丘(Ⅲ)、ひばりが丘(Ⅳ)	169
同　第5区	上瀬戸口、下瀬戸口、田原、上原、真角上、真角下	190
同　第6区	下石坂、中石坂、上石坂、石坂、坂元	70
同　第7区	落水田、中落水田、上芦谷原、中芦谷原(上)、中芦谷原(中)、中芦谷原(下)、上停車場、下停車場	132
同　第8区	川津原、川影、下芦、元芦、北脇、七又、七又住宅	131
同　第9区	中福良、中郡、槌、鹿屋、尾谷口	87
同　第10区	西寺原、中寺原、東寺原、轟木(A)、轟木(B)	74
三　体第1区	川床、田方、上宇都口、下宇都口	85
同　第2区	上中野、下中野、中野(上)、中野(下)、学校住宅	67
同　第3区	坂下、内野々、一本松	45

区　　名	部　　落　　名	世帯数
同　第4区	銀湯、大霧(下)、大霧(中)、大霧(上)	17
万　膳第1区	有村、前有村、後有村	32
同　第2区	東古屋志、西古屋志、古屋志、川窪、和田、中園、松原、女田、渡瀬、吉原	103
同　第3区	錆河、新改、成政、九日田、上扇之迫、中扇之迫、下扇之迫、中福良、西郷、町営住宅	101
同　第4区	上大窪、中大窪、大窪、府鳥、下府鳥、永野	68
同　第5区	浅谷、水堀(A)、水堀(B)	48
高千穂第1区	林田、硫黄谷附近	110
同　第2区	主として丸尾附近	110
同　第3区	国道223号線・小谷川・殿湯川で囲まれた北側部分	100
同　第4区	国道223号線・町道母が野線・高千穂小～町グランド～教員住宅前道路～雇用促進住宅横の道路で囲まれた部分	160
同　第5区	町道母が野線と旭が丘住宅を含む殿湯川で囲まれた部分	120
同　第6区	地図上で小谷川より北側	130
同　第7区	小谷川・国道223号線・町道母が野線で囲まれた部分	130
同　第8区	母が野・栗川地区（旧1区）	110
中津川第1区	下安楽、上安楽	70
同　第2区	妙見、折橋	35
同　第3区	下犬飼、中犬飼、上犬飼、新川、田代	77
同　第4区	下荒田、上荒田、戸ノ道、深谷、古道	57
同　第5区	上改田口(上)、上改田口(下)、下改田口(上)、下改田口(下)	77
同　第6区	溝口、下越、上越、上荒瀬、中荒瀬、下荒瀬	61
同　第7区	通山前、通山後、上湯之元、下湯之元、上鶴、下鶴、健崎下、健崎上	81
同　第8区	西横瀬、上湯窪、下湯窪、上馬場、下馬場、下板小屋、中板小屋、上板小屋	93
持　松第1区	真方上、真方中、真方下、臼崎上、臼崎中、臼崎下	65
同　第2区	持松西、持松東、持松中、持松北	77
同　第3区	下笹段、中笹段、上笹西、上笹南、川久保、高天原、崩渡、伊勢谷	75
同　第4区	東下村、下村、上村、西市後柄、大渡、中春、黒岩	65

参考　高千穂校区は4区から8区に再編成（昭和56年度より）

◆地名あれこれ　（その二）　（窪田記）

◇**安楽**

この地名は、この地をある行者が訪れ、神のことばで「この地に温泉出ずべし、安楽に居住を得べし」のお告げがあったことになっているが、溝辺を領していた肝付氏と何等かの縁があるのではあるまいか。曽於郡にも安楽があるから。

◇**妙見**

伊邪那岐神社は、もと妙見神社と呼ばれ妙見崎にあったからよばれた名といわれる。明治初の神社調には、折橋にその名が見え、古道、深谷にも同名の社がある。この辺りは税所の一族瀬戸口氏に因んで**瀬戸山**の地名も残っている。オシタテ山があり、トネリコが栽培されていたともいう。ホツセバイは星合原という、いわれありげの地名である。このあたりは麓地方に魚塩の送られる交通の要路に当り、岩堂観音に似た阿弥陀石像が安楽にも発見せられた。

◇**犬飼**

和気公とのゆかりを説く説もあるが、特に犬と関係なく、土俗がインケとよんでいたのであろう。犬飼滝に松が茂っていたからであろうか、坂本竜馬は、「蔭見の滝」と記して土俗のことばを巧みに写していて面白い。

◇**横瀬**

小字にこの名がない。どこか横流する川の辺りの名が一般化したものであろう。**板小屋**などもその例か。

◇霧島の温泉場の**硫黄谷**、**ミョウバン**は、泉質による地名であったが、のちもっぱら栄之尾と書かれた温泉を、白尾国柱は可愛峡と記しているから、その地形が呼称のもとであろう。

◇**牧場**

林田バスの停留所に今なお「牧場」がある。これは、**製作所**とともに国立の施設ができた明治の頃からの呼称である。

◇**寺原**

林田バス停に「寺原」がある。以前は平原と書いた。平坦な台地を「デラ」と呼ぶから、これも地形からつけられたもののようである。

◇明治になっても踊郷の名称は二十年も使われた。**牧園町**の名は牧園小学校から取られたという。牧園は馬場の近隣の名称である。